



i a tu é Roger Ackroyd ?

アクロイドを 殺したのはいだれか

PIERRE BAYARD

ピエール・バイヤール……著

大浦康介……訳

筑摩書房



殺したのはだれか

Qui a tué Roger Ackroyd?

PIERRE BAYARD

ピエール・バイヤール……著

大浦康介……訳

筑摩書房

Pierre Bayard, *Qui a tué Roger Ackroyd ?*

© Editions de Minuit, 1998

This book is published in Japan by arrangement with les Editions de Minuit, Paris, through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

ピエール・バイヤール *Pierre Bayard*

1954年、パリ生まれ。パリ第八大学教授。文学を精神分析に応用する「応用文学」の提唱者であると同時に分析療法の実践家でもある。著書に『嘘つきのパラドックス——ラクロ論』、『フロイト直前のモーパッサン』、『主題外——ブルーストと冗長性』、『失敗作をいかに改良するか』（いずれもパリ、ミニュイ社）ほか多数。

大浦康介 *Yasusuke Oura*

1951年、長崎県生まれ。京都大学助教授。専門は文学理論。著書に『文学をいかに語るか——方法論とトポス』（新曜社）、『哲学を読む——考える愉しみのために』（人文書院）など。

アクロイドを殺したのはだれか

2001年9月15日 初版第1刷発行

著 者 ピエール・バイヤール

訳 者 大浦康介

発行者 菊池明郎

発行所 株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前2-5-3／郵便番号 111-8755

振替 00160-8-4123

印刷＝明和印刷／製本＝積信堂

ISBN4-480-83711-6 C0098

Printed in Japan

装 幀 神田昇和

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが下記に御送付下さい。送料小社負担にてお取替致します。ご注文・お問い合わせも下記へお願いします。

〒331-8507 さいたま市櫛引町 2-604

筑摩書房サービスセンター TEL 048-651-0053

アクロイドを殺したのはだれか ☆ 目次

登場人物 Ⅳ

序 Ⅰ

A 捜査 Ⅰ

第一章 殺人 Ⅱ

第二章 捜査 Ⅲ

第三章 ヴァン・ダインの法則 Ⅳ

第四章 黙っているのも嘘のうち Ⅴ

B 反捜査 Ⅲ

第一章 終りなき夜 Ⅲ

第Ⅰ章 嘘つきのパラドックス 98

第Ⅲ章 ここが変だ 111

第Ⅳ章 理想的な殺人犯 123

C 妄想 135

第Ⅰ章 道の交わるところ 137

第Ⅱ章 妄想とはなにか 152

第Ⅲ章 妄想と理論 166

第Ⅳ章 妄想と批評 184

D 真実 195

第Ⅰ章 カーテン 197

第Ⅱ章 真実 214

第Ⅲ章 眞実のみを 〇〇〇

第Ⅳ章 そしてすべての眞実を 〇〇〇

訳者あとがき 〇〇〇

アクロイドを殺したのはだれか

マリ
に

すこしのあいだ死のような沈黙があつた。

そしてわたしは笑つた。

「あなたは狂つてますよ」とわたしは言つた。

「いいえ」とポワロは落ちて着いて答えた。「わたしは狂つてなんかいません」

（『アクロイド殺害事件』）

登場人物

ジェイムズ・シェバード

キングズ・アボット村の医師、独身、この物語の語り手。

キャロライン・シェバード

ジェイムズの姉、無職、独身。弟と同居している。好奇心旺盛なことで知られ、それを満たすのに村中にはりめぐらされた情報網をもっている。

ロジャー・アクロイド

土地の名士。恋人だったファラーズ夫人からの一通の手紙を読んだあとに殺されているのが発見された。この手紙はファラーズ夫人が自殺する直前に書いたものだが、夫人はそのなかで、一年前から自分を恐喝していた人物の名前を明かしていた。ファラーズ夫人はこの人物から、彼女が（一年あまり前に）自分の夫を殺したことを警察に告げるぞと脅されていたのである。

セシル・アクロイド夫人

ロジャーの弟シリル・アクロイドの寡婦。最近カナダから娘のフロラを連れてロジャー・アクロイド邸に引越してきた。

フロラ・アクロイド

セシル・アクロイドの娘、ロジャー・アクロイドの姪。

ラルフ・ペイトン

ロジャー・アクロイドの亡妻の連れ子。ロジャー・アクロイドは彼を養子としてあつかっている。小説の終りの方で、エルキュール・ポワロの調査により、小間使アーシュラ・ボーンの夫であったことが判明する。

ヘクター・ブランド

アフリカ在住の名うての狩猟家。キングズ・アボット村に一時滞在している。ロジャー・アクロイドの友人で、イギリスにいるときは彼のところに泊めてもらっている。

ジョフリー・レイモンド

ロジャー・アクロイドの個人秘書。

ジョン・パーカー

ロジャー・アクロイドの執事。

アーシュラ・ボーン

ロジャー・アクロイドの小間使。小説の最後の方でラルフ・ペイトンの妻であったことが判明。

エリザベス・ラッセル

ロジャー・アクロイドの家政婦。村ではロジャー・アクロイドの再婚相手候補と目されていたが、彼と結婚するチャンスは、セシルとフロラ・アクロイド母娘の到着によって、またなによりもロジャー・アクロイドとフアラーズ夫人が恋仲になったことで潰えてしまった。チャールズ・ケントの母。

チャールズ・ケント

エリザベス・ラッセルの息子。彼がだれであるかはエルキュール・ポワロによって暴かれる。落ちこぼれの麻薬常用者。シェパード医師は、アクロイド殺しのあつた晩、アクロイド邸の敷地から出てきたところで、だれかは分からないまま彼とすれちがっている。

エルキュール・ポワロ

隠退した私立探偵。

* 以下の本文中の訳者による補足および訳注は「」で示した。

序

こんにち多くの読者はだれがロジャー・アクロイドを殺したかを知っている。とくに推理小説の愛読者のなかには、アガサ・クリスティーのこの小説のもとになっている手法がどんなものかを知っていて、「殺したのは語り手だ」と的確に答えることができる者も少なくない。ミステリー通なら犯人の名前——シェパード医師——を挙げることもできるはずである。

この作品は、そこで使われている手法の獨創性によって大きな成功を博し、文学史上も有名な作品のひとつとなった。その扱いは推理小説というジャンルの枠をも超えている。人文諸科学の分野でのいくつもの研究がこの小説を対象としてなされ、この小説にもとづいて、こうした構造の特殊性が誘発するさまざまな理論的問題が論じられたのである。^{＊₁₆}

しかし、アガサ・クリスティーを一躍有名にしたこの小説は、発刊当時、万人の評価を得たわけではなかった。何人もの批評家がこれに異を唱えたのであって、その主張は最近でも繰り返えされている。すなわち小説家クリスティーは、語り手を犯人とすることで、推理小説の作者と読者のあ

いだで交わされる暗黙の読書契約の本質的な部分に違反したのだという主張である。クリステイ
はいわばインチキを行なったというのだ。^{***}

ただ奇妙なことに、作品を称讃する者もこれを敵視する者も、肝心のところでは態度を同じくし
ている。つまりだれも、ここでのもっとも重要な点、すなわちシェパード医師が犯人であるとい
点を疑問に付そうとはしないのである。しかし、語り手の背後に殺人犯を隠すことが正当であるか
どうかを問う前に、この先決問題に決着をつけておく方がいいのではないか。犯人はほんとうに小
説中の捜査で挙げられている人物なのかをこそ問うべきではないだろうか。

本書の企図はそこにある。われわれは、一般にひろく受け入れられているシェパード医師犯人説
を離れ、また称讃でも非難でもない第三の立場を模索しつつ、あらかじめ証明されない意見はいか
なるものでも認めないという原則のもと、だれがロジャー・アクロイドを殺したのかというこの単
純な問いに答えようと思う。

*

クリステイのこの小説の成功は、じつは別の事情と裏腹の関係にある。つまり彼女がそこで用
いた手法の見事さは事件の謎そのものを隠蔽しかねない。読者は、真実を最後の最後まで見えなく
したクリステイの手法の巧妙さに気をとられて、犯人問題から注意を逸らし、小説で提案されて
いる推理が納得のゆくものであるかどうかの検討を怠りかねないのである。ところがこの推理たる

や、エルキュール・ポワロが最後の数ページでさりとやつのけるといふ代物なのだ。ポワロはおのれの妙案を喜ぶあまり、複雑な謎が呼び起こす無数の問題にふたたび立ちかえろうとはほとんどしないのである。

したがって本書が第一の原則とするのは、厳密さへの配慮である。推理小説というものは——すくなくともアガサ・クリスティーの小説が属しているようなジャンルの推理小説は——完璧なロジックに従うものでなければならない。この厳密さへの配慮は司法上の目標と関係している。もしシエバード医師が殺人犯ではないということが判明するようなことにでもなれば、エルキュール・ポ

* この小説はとくにロラン・バルト、ジュラール・ジュネット、A・J・グレマス、ウンベルト・エーコなどの理論家、そしてレイモンド・チャンドラーやアラン・ロブ＝グリエといった多くの作家によつて論考の対象とされた。またジョルジュ・ペレックは、死の直前、この小説にかんする論文を準備していた (*Literature*, Larousse, 1983, n° 49, p. 15)。

* * アガサ・クリスティーは自伝のひとつでこうしたインチキ扱いに言及している (*An Autobiography*, Harper Collins Publishers, 1977, p. 352-353) [『アガサ・クリスティー自伝(下)』乾信一郎訳、ハヤカワ文庫、一九九五年、一一四頁)。クリスティーによれば、小説をよく注意して読むならこうした非難は当たらない。エクリチュール効果(文章に隠し込まれた二重の意味)がシエバードによつて細かく計算されているからである。しかしこの種の非難は最近でもロラン・バルトやジュラール・ジュネットの著作のなかで引きつづきなされている。この小説の発刊当時の受容については次の著書を参照のこと。Robert Barnard, *A Talent to Deceive. An Appreciation of Agatha Christie*, New York, Dodd, Mead and Company, 1980, p. 37-39; Dennis Sanders & Len Lovello, *The Agatha Christie Companion. The Complete Guide to Agatha Christie's Life and Work*, New York, Avenel Books, 1985, p. 33-34.

ワロ、および彼につづいてその推理を無批判に受け入れたすべての人々が行なったのは誤審だったということになるのである。

われわれは本書で、この事件のすべての証拠事実をふたたび丹念に拾い上げ、エルキュール・ポワロの推理は有効なのかどうか、シェパード医師が殺人を犯したというのはほんとうに確かなのかどうかを、できるかぎり客観的に検討してゆきたい。一篇の推理小説を読み直すことを目的とする本書は、したがって、畢竟みずから推理小説の体裁をとることになる。われわれ独自の推理は、本書の終りの方で披露されるはずである。

*

しかし本書はたんに推理小説についての推理小説であるだけではない。本書はまた二つ目の、より理論的な目的をもっており、それは妄想、わけても解釈妄想に関係している。エルキュール・ポワロの推理を疑問に付すということは、それを妄想だとみるということだからである。ちなみにそうした非難は、誇らしげに自身の考察結果を伝えるポワロにたいして、それを呆然と聞くシェパード医師自身がしているものでもある。

ポワロの推理を疑問視するということはまた、われわれ自身が妄想にかられた読みかたをするリスクを引き受けることでもある。なぜならそれはポワロと同じ手順を踏むことだからである。つまり、彼が小説の全体をつうじて行なっているように、事件の手がかりを綿密に探り、もろもろの事